29Y-pm08

保険薬局における高齢者の口腔乾燥ケア

〇田代　陽子[1], 川上　美好[1], 吉山　友二[1], 大島　崇弘[2], 橋本　いく子[2]([1]北里大薬, [2]大島薬局)

【目的】保険薬局に来局する患者の多くは高齢者であるため、薬局薬剤師のケアにより、高齢患者で問題視される口腔乾燥に関する問題を未然に防ぐ可能性が考えられる。本研究の目的は、保険薬局において高齢患者の口腔乾燥に関するモニタリングを実施することが、高齢者の QOL 向上に寄与できる可能性を明らかにすることにある。【方法】保険薬局に処方せんを持って来局した 65 歳以上で、口腔乾燥等の自覚症状がみられ、本研究に同意の得られた患者 20 名を対象とした。主観的口腔乾燥の評価として、口腔乾燥、舌の異常、味覚異常、口臭等の自覚症状に関して、「ない、時々・少しある、いつもある」の 3 段階で評価した。さらに、客観的口腔乾燥の評価として、唾液湿潤度試験紙（KISO-WeT）を用いて、口腔内の唾液湿潤度を測定し、「豊富、正常範囲、低下、乾燥、重度乾燥」の 5 段階で評価した。【結果・考察】口腔機能には様々な役割があり、高齢者における口腔乾燥状態は、口腔領域だけでなく、全身状態にも大きく影響すると考えられる。また、高齢者は複数の疾患を有し、それぞれに治療薬が処方されている結果、服用薬剤数も増加し、口腔乾燥等の症状が薬剤に起因する場合も少なくないことが懸念される。主観的には、口が渇く（90％）、水をよく飲む（60％）、口がネバネバする（55％）といった症状が認められた。唾液湿潤度試験では 20 例中 17 例が「低下」であり、口腔乾燥の自覚症状を持つ患者が客観的にも乾燥状態にある傾向が示された。また、患者全員が「口腔乾燥」に関する副作用を持つ薬剤を服用していた。本検討から、保険薬局で自覚症状の有無を確認し、疑義照会による服用薬剤の変更や、湿潤剤の使用等のよって対応することは、高齢者の QOL の向上、さらに健康寿命を延伸しうる新たな保険薬局の役割となりうることが示唆された。